

## 卓 話

平成 21 年 6 月 9 日

### 『クラウドコンピューティング時代の到来』

株式会社電算システム  
専務取締役 田中靖哲様

クラウドコンピューティングとは、インターネット経由でソフトウェアやサービスを利用するコンピュータの利用形態のことです。インターネットを図示する際に雲(クラウド)の絵で表現することに由来します。情報処理はデータセンターなどに設置したサーバ側で行なうため、利用者はネットに接続していれば端末の性能を気にせずにソフトやサービスが利用できます。企業や官公庁でもクラウドの技術を使えば高性能のコンピュータや大容量の記憶装置を自前で所有する必要がなく、共同利用による運用コストの低減も期待できます。



クラウドコンピューティングの将来性を探るため、雲の向こう側の象徴をグーグルに、こちら側の象徴をマイクロソフトとして考えてみます。雲のこちら側のマイクロソフトは、どんなにがんばっても 1 台のコンピュータの中に閉じられた限られた情報の利用手段を提供することしかできません。それに対して、雲の向こう側のグーグルは、世界中のネット上のものを一つの巨大なシステムとみなし、それらが提供する各種サービスの利用手段を提供することができます。例えば、グーグルの地図検索サービス解放により、開発者は地図に関するサービスを自由に開発でき、自社に地図情報や取り扱い技術がなくても短時間・低コストで新しいサービスを実現できるのです。開発者やユーザにとって、これは非常に魅力的であり驚異的な差にみえます。

クラウドコンピューティングの構想は、目新しいものではありません。ハードディスクを持たないネットワークコンピュータ構想が 1995 年に提唱されましたが、当時はネットワークへのアクセス速度も遅く、ネットワークの向こう側の処理能力も低いため、挫折しました。(セキュリティの観点から見直されている)。その後、ASP (Application Service Provider ビジネス用のソフトをインターネットを通じて顧客にレンタルする事業者のこと) がブームになりましたが、普及には到りませんでした。しかし、ネットワーク環境の画期的な進化を背景に、ASP を改善したサービスが SaaS (Software as a Service クラウドコンピューティングの一形態) と呼ばれ、再び脚光を浴びています。

雲のどちら側に情報を置くべきかが、これからのコンピュータ社会の構造を決定する本質です。歴史的にも IT 業界の覇権は情報の重心をめぐる争われてきました。

注目点は、ユーザの感覚、すなわちデータを雲の向こうに置くことへの抵抗感です。例えば、電子メールをグーグルに預けることに拒否反応を示すか否かです。データを雲の向こうに置けるなら、雲の向こうのコンピュータは、必要なときに必要なだけ使えるため、企業は自前でコンピュータを調達するより、早く、自在に、低コストでの利用が可能です。情報の重心が雲の向こうに移行し、「持たざる IT」の時代がやってくるのか、その凌ぎ合いが始まっています。